ドイツにおける授業（歴史）の検討

島根大学　宇都宮明子

対象授業
実施日時：2023 年 3 月 13 日（月）1 時間目（8 時～8 時 45 分）
場所：デュイスブルク南総合制学校
教師：マリア・ハイター

１．ノルトライン・ヴェストファーレン州のコア・レアプランにおける歴史教育

授業を検討する前に、デュイスブルクが属するノルトライン・ヴェストファーレン州（以下、NRW 州と略す）の 2014 年版歴史科後期中等段階コア・レアプラン[1]（以下、コア・レアプランと略す）を概観する。

(1) コア・レアプランの全体構成

コア・レアプランは、アビトゥア試験の受験を前提とした州全体の統一的基準を示したカリキュラムである。後期中等段階に相当するギムナジウム上級段階は、1 年間の導入段階を経て、基礎的な一般教養と学問入門的教育を図る上級段階の学習レベルに相当する基礎コースと、より高度な認知操作を多様に扱い、さらに深い考察を求める重点コースに分かれる。古代から現代までの歴史を時系列で学ぶ前期中等段階とは異なり、上級段階はアビトゥア試験を想定した近現代史を中心としたテーマ学習がなされている。

コア・レアプランは、①歴史科の使命と目標、②歴史科のコンピテンシー領域と内容領域、③導入段階、基礎コース、重点コースそれぞれで期待されるコンピテンシーの到達度と内容の重点、④学習成果の検証と評価、⑤アビトゥア試験の概要、⑥段階とコース全体を通した想定される累積的なコンピテンシーの到達度という構成からなる。

コア・レアプランの目標は、熟考的な歴史意識の育成である[2]。歴史意識の育成は、ドイツの多くの州の学習指導要領（州により学習指導要領の名称が異なるため、州を越えて総括的に取り上げる場合は、学習指導要領とする）における代表的な目標といえる。コア・レアプランでは、歴史意識を育成するために、歴史的思考を中核に位置づける[3]。歴史的思考は、歴史的な問いに基づき、歴史的文脈に関連づけて過去を解釈して語る再構築と、歴史文化にみられる多様な歴史から語りの構造を読み取る脱構築からなるとされる[4]。

上級段階のコンピテンシー領域は、事象コンピテンシー、方法コンピテンシー、判断コンピテンシー、行為コンピテンシーで構成される。事象コンピテンシーは[5]、時間に関するイメージ、年代を推し量る方法、歴史的時代、過程、構造に関する基礎的な知識に関わる資質・能力である。過去の状況や発展、生活史を史資料から把握し、共時的な関連や通時的な発展を解釈的に再構築して意義深く描写したり、前提や意図に応じて既存の文脈づけや解釈や記述を分析（脱構築）したりする能力の前提である。

方法コンピテンシーは[6]、多様なジャンルの史資料の解釈や、様々な形式の歴史的表現の分析や批判的検討、歴史による根拠づけに自主的に取り組むための資質・能力である。

判断コンピテンシーは[7]、論拠に基づいた判断ができるようになって身につくものであり、歴史的事象や関連の選択、関連づけ、解釈に関わる事実判断と、規範となるカテゴリーが歴史的事象に応用され、明らかにされる価値判断からなる。事実判断の基準は事実としての適切性、内的一貫性、論拠の妥当性である。価値判断には自身の価値観が反映され、その価値基準の時代拘束性や継続性も考慮される。多様な見方を確認し、取り入れることが判断コンピテンシーの構成要素とされる。

行為コンピテンシーは[8]、歴史的思考の過程と成果を日常生活で有効なものにするための能力・能力で、歴史的に熟考された行為をするための準備、歴史文化や想起の文化への参加に関わるものである。自分自身の行為の条件や可能性について熟考し、その行動に向けた目標や方略を構想するために歴史的経験が活用することで、社会における具体的な行為を可能にする行為コンピテンシーが発揮される。

コンピテンシーは内容領域を視野に入れて育成すべきとされ、その内容領域は、現在関連や生活世界を鑑みて現在の人々にとり重要であると考えられる問いから選択される[9]。選択された内容領域は、①世界史的展望での他者性の経験、②イスラム世界とキリスト世界：中世と初期近代における 2 つの文化の遭遇、③歴史的展望における人権、④進歩と危機のはざまにある近代の産業社会、⑤ナチズムの時代－前提、統治構造、影響、意味、⑥19･20 世紀におけるナショナリズム、国民国家とドイツ人のアイデンティティ、⑦近代における条約締結と平和秩序である[10]。

コア・レアプランは、歴史意識の育成を目標とし、その育成に向けた歴史的思考を実現するためのコンピテンシーを導入段階・基礎コース・重点コースといった段階ごとに、内容領域に応じて明示して累積的に育成を図るコンピテンシー志向の学習指導要領であることが分かる。

(2) 重点コースの構成

ここでは、本授業の該当コースである重点コースに焦点を絞って検討する。

①重点コースにおけるコンピテンシー構成

重点コースにおいて期待されるコンピテンシーの到達度を示したのが表 1 である。

表１　重点コースにおけるコンピテンシーの到達度

	各コンピテンシーの期待されるレベル
事象コンピテンシー	・歴史的事象、人物、過程、構造を時代順、空間的、テーマ的な関連において多様に分類する ・歴史的事象、人物、過程、構造、時代の特徴を関連づけて、多様な専門的概念を適切に用いて説明する ・歴史的事象や過程の契機や原因、経過、結果、影響を、それらの相互関係や歴史的現象の同時性と非同時性において明らかにする ・それぞれの歴史的な枠組み条件や行為の余地を背景として、また、それぞれの関心や思考パターンを持つ関係者や当事者の見方から、事象、発展、構造、人々の思考や行為の関連を説明する ・現在における過去の痕跡を確認し、現在の現象の今日的な意義や歴史的な条件を説明する ・比較、類推、差異化によって、範例的に歴史的状況を現在と関連づける

方法コンピテンシー	・必要な操作の一部を明らかにして議論することで、歴史的調査の方法論を自主的に決定する ・学校内外の主要なメディアで専門的かつ自主的に調査し、複雑な問題設定に対する情報を適切に得る ・資料と描写の違いを説明し、それらからの情報を相互に比較し、歴史の構築性を強調する ・複雑な資料における理解に関わる問題を確認し、専門性に即して必要な解説を行う ・多様な形式の歴史的調査（現在から、通時的、共時的、見方・イデオロギー批判的、歴史的事例の調査）を応用する ・学術的な基準に基づき、文献史料の解釈や、歴史的記述の分析や批判的検討の手順を専門性に即して自主的に援用する ・地図、図版、統計、図表、グラフ、風刺画、映画、歴史的な現物資料（及び、記念碑）といった非文献資料を自主的かつ専門的に解釈し、分析する ・複雑な関連を、図での概略、グラフ、構造図において、構造的、視覚的に簡潔かつ的確に表現する ・高度で複雑な専門特有の状況を、適切な言語手段や専門用語／カテゴリーを用いて、受け手に関連づけて問題志向的に表現し、電子データ処理システムも活用して分かりやすく提示する
判断コンピテンシー	・それぞれの価値観の文脈、自由と制約の緊張関係において、歴史上の人物の行為とその動機や関心を判断する ・歴史的状況の特殊性を、更なる発展や現在にとってのアンビバレントや歴史的意義において判断する ・異なるカテゴリー、見方、時間レベルのもとで、歴史的状況を判断する ・多様な思考パターンや正当化の形式、世界観、人間像を判断する ・ジェンダー批判的な観点からも、歴史的状況に対する概念活用の妥当性を議論する ・立場や見方の拘束性、根底にある規範的なカテゴリーを考慮して。歴史解釈の妥当性と意義を議論する ・根拠となる基準を明らかにして、歴史的状況を多様に判断する ・そのつど主張される時代を越えた妥当性要求とは区別して、価値体系や価値基準の歴史的な制約や変動性を論じる
行為コンピテンシー	・学習グループ内、または必要であればグループ外で、他の立場との矛盾において歴史的世界や人々と自身やグループとの関係を発表する ・歴史的経験とそのつど優勢な歴史的な枠組み条件を考慮して、多様な現在のための行為の選択肢を開発する ・歴史的状況とその結果に対する現在の責任に関する議論において、多様な立場を取る ・公的な想起の文化の形式への参加に対する可否を決定し、その決定を多様に理由づける ・公的な歴史文化と想起の文化に対して、必要であれば批判的な距離を置いて、自分なりに多様に貢献しながら参加する ・自身の歴史的な語りを提示し、基本的な歴史な論争問題に対して自分の立場を主張する

（コア・レアプラン S.34-36 を筆者訳出。）

事象コンピテンシーは、単に歴史的事象、人物、過程、構造を分類し、適切に説明するという基礎的な知識を確実に習得するだけではなく、基礎知識間の連続性、断絶性を把握し、その関係性を説明するとともに、現在における意義や現在関連までも視野に入れて歴史的事象などが持つ今日における意義を明らかにすることを求めている。

方法コンピテンシーは、資料のジャンルを理解した上での史資料の分析的・解釈的な調査だけではなく、歴史学の専門的な学問方法に基づいて自主的に調査方法を決定し、高度な専門用語やカテゴリーを活用して多様な史資料にみられる歴史的記述や表現を批判的に検討するという高度な方法論を援用した調査まで要求する。

判断コンピテンシーは、多様なカテゴリーや見方を踏まえた根拠の基準を明確にした上

で、歴史的事実を当時の規範や時代や場所の拘束性を考慮しながら根拠づけて判断したり、歴史上の人物の行為を当時の価値観に基づいて評価したりする事実判断と、時代を越えた妥当性や価値体系に基づいて、歴史的事実の現在や今後における意義や価値を判断する価値判断からなる。

行為コンピテンシーは、グループ内外の他者との協議の中で行為に対する自身の考えを明確にするとともに、歴史文化や想起の文化を批判的に検討し、その参加に関する意思決定や、その意思決定に対する責任を根拠を持って引き受けるための資質・能力で、歴史を通した現在の社会への参加を促すものである。

重点コースにおけるコンピテンシーの到達度は、アビトゥア試験に向けた中等段階修了時までに獲得すべきレベルであるため、大学での高等教育の準備段階として歴史学の方法論に基づいた歴史的思考による学問入門的で高度な資質・能力の育成が図られていると判断される。

②重点コースにおける内容領域

重点コースで扱う内容領域は、前述の内容領域④～⑦である。分析する授業は、内容領域⑤ナチズムの時代－前提、統治構造、影響、意味に該当する。内容領域⑤の構成が表２である。

表２　内容領域⑤ナチズムの時代－前提、統治構造、影響、意味の構成

内容の重点	コンピテンシーの期待されるレベル
ナチズムの政治的・イデオロギー的前提 ドイツとヨーロッパにおけるナチズムの支配 過去政策と「過去の克服」	事象コンピテンシー ・ワイマール共和国崩壊の長期的・短期的理由と NSDAP の台頭との関連を、多様な因果関係と相互作用の観点で明らかにする ・支配体制におけるナチ・イデオロギーの本質的要素、その起源、機能について説明する ・ナチストの用語の使い方にみられるイデオロギー的性格を説明する ・ナチズムの全体主義的な支配体制の成立と根本的な確立を説明する ・ナチズムにおける住民の支持、順応、抵抗の動機と形式を説明する ・組織的な迫害と絶滅に至る、ドイツとヨーロッパのユダヤ人に対するナチズム国家の狙いを定めた政策を説明する ・ナチズムの経済政策と外交政策を用いて、実際の政治と公的な表明との違いを明らかにする ・絶滅戦争とジェノサイドの関係を説明する ・占領地域とドイツの２つの国家における異なる事例を例にして、占領国とドイツ当局がナチズムにどのように対処したかを説明する 判断コンピテンシー ・啓蒙思想を背景にナチスの支配を判断する ・ナチ・イデオロギーを例に、思考パターンや価値体系の連続性と断絶性を判断する ・ナチズムを例に、歴史における構造と個人が持つ意味を論じる ・選択された例を用いて、同時代の人々の罪と責任を慎重に検討する ・選択された例を用いて、ナチス政権に対する多様な抵抗の形式を判断する

（コア・レアプラン S. 38-40 を筆者訳出。）

本内容領域は、ナチズムの時代を対象としているため、基本的には外交、政治、経済、社会、文化といった多様な側面からのナチズムにおける支配の検討と、ナチ・イデオロギーがもたらしたジェノサイドと戦後におけるその罪と責任を負う過去政策と過去の克服が主要なテーマである。そのため、本授業のテーマであるワイマール共和国時代の「背後からの一突き伝説」は、内容の重点では、ナチズムが成立する政治的・思想的前提であり、期待されるコンピテンシーの到達度では、文言的に直接関わるのは、事象コンピテンシーの「ワイマール共和国崩壊の長期的・短期的理由と NSDAP の台頭との関連を、多様な因果関係と相互作用の観点で明らかにする」のみである。しかし、「背後からの一突き伝説」は、ナチ・イデオロギーと親和性が高いため、「支配体制におけるナチ・イデオロギーの本質的要素、その起源、機能について説明する」、「ナチ・イデオロギーを例に、思考パターンや価値体系の連続性と断絶性を判断する」といった資質・能力の育成に寄与すると考えられる。

以上の検討から、コア・レアプランの重点コースでは、中等段階の最終段階として、当時の多様な視点から歴史を捉える多展望性や他者理解、現在の視点から歴史をみる現在関連といった歴史学習の原理に基づき[11]、史資料の脱構築的な分析や検討から歴史を解釈し再構築するという歴史学の方法論に基づく高度な歴史的思考を通して歴史意識の育成が図られているといえる。

２．マリア・ハイター氏の歴史授業の検討

前章で、コア・レアプランにおける歴史学習では高度な歴史的思考を通して歴史意識の育成が図られていることを考察した。本章では、コア・レアプランの歴史学習を踏まえて、本歴史授業を検討していく。

(1)授業構想の検討

本授業は、重点コース 1 年目の 9 名の生徒を対象とし、2023 年 3 月 13 日（月）に実施された。本授業が位置づく一連の授業のテーマは、「1918～1933 年までの変革期の社会：なぜワイマール共和国は安定することができなかったのか」である。本授業のテーマは、「敗戦責任に関する背後からの一突き伝説：ワイマール共和国とナチズムにおけるその成立と影響力に関する態度決定」である。そして、授業目標は、「生徒は事実の表明としての背後からの一突き伝説をその歴史的成立を嘘として概略することで、伝説の影響力とその変種に関する態度を決定する。そのために、学術的な描写に基づいて、事実判断を表現し、最後に議論において、背後からの一突き伝説の重要性を陰謀論として評価する」である。

本授業は、コア・レアプランの内容領域⑤「ナチズムの時代－前提、統治構造、影響、意味」に属する。内容領域⑤では、ワイマール共和国崩壊の長期的・短期的理由と、NSDAP の台頭との関連を説明することが求められており、それに対応して、本授業は、イデオロギーの観点からワイマール共和国の崩壊とナチズムの台頭を考察するものである。そして、授業目標から、ハイター氏が、背後からの一突き伝説は、ナチ・イデオロギーを経て、現在の

陰謀論にまで続く継続性を有していると考えていることは明らかであり、内容領域⑤の判断コンピテンシーである「ナチ・イデオロギーを例に、思考パターンや価値体系の連続性と断絶性を判断する」ことがめざされていることが分かる。さらに、学術的な描写を分析する議論を通した事実判断を求めており、学問入門的な方法と協同学習の手法を通したイデオロギー解釈、事実判断や価値判断の形成といったコア・レアプランの上級段階の重点コースにおける歴史学習に即した適切な授業が構想されていると判断される。

(2)授業展開

本授業の録画、文字起こしデータに基づいて作成した授業展開が以下である。

本授業の授業展開

	教師の働きかけ	生徒の活動	学習意図
導入	「背後からの一突き伝説」に関するビデオの視聴 「背後からの一突き伝説」というプロパガンダの事実分析と事実判断をするという授業目標の提示 「背後からの一突き伝説」の成立と強い影響を判断するという議論の論点の提起	オンライン記事からの風刺画とビデオに基づいた「背後からの一突き伝説」の成立とその変種がもたらした後に与える影響の考察 「背後からの一突き伝説をどのように考えるのか」という態度決定に向けた考察	問題設定の提示と問題意識の形成 議論の基盤形成
展開Ⅰ	事実確認（資料に基づいた嘘としての「背後からの一突き伝説」の概略）と事実判断（異なる見方や根拠づけられた機能化の説明からの伝説の判断）をするよう支援 グループでの活動が事実確認から事実判断へと深化するよう支援	史資料を活用した「背後からの一突き伝説」というプロパガンダを成立と影響の両面から検討するグループ活動 ＜1グループの活動内容＞ ①「背後からの一突き伝説」が成立した経緯の概略（事実確認） 陸軍最高司令部は戦争に敗北し、フランスとの和平交渉をしなくてはならなかった→ヒンデンブルクは陸軍最高司令部は最善を尽くしたが、政治が軍を背後から刺したと説明したことで「背後からの一突き伝説」が成立した →ヒンデンブルクの主張の根拠の検討 ②「背後からの一突き伝説」がどのように利用されたかの考察（事実判断） 極右が反ユダヤ主義的立場から左翼、ドイツ社会民主党を攻撃するプロパガンダを戦争の敗北で衝撃を受けたドイツ国民が信じた→極右の新聞での伝説の活用 プロパガンダによる嘘を定着させる宣伝効果、「戦争に負けたのではなく、背後から鋭い刃物で一突きされた」という表現は、敗北を認めたくない国民にとっても耳障りがよく、信じやすい ③「背後からの一突き伝説」の影響の考察 嘘が右翼をますます過激化させ、嘘が定着していった、1923年のヒトラーとルーデンドルフの一揆（ミュンヘン一揆）に極右が関わった、後にヒトラーがこの伝説を宣伝の天才として活用した→影響	事実判断 伝説の重要度の検討 自身の構想の協働での構築

展開Ⅱ	修正、補足、フィードバックのためのグループ活動の成果の観察 根拠に基づいた事実判断をするよう支援 当時の時代から伝説の成立や影響を評価するための価値判断の観点を見つけるよう支援 イデオロギーはナチズムという新しい支配を根拠づけた一方で、陸軍最高司令部とヒンデンブルクを支えたという 1920 年代のイデオロギーの意義を考察するよう支援 陸軍最高司令部の正当化に着目するとともに、正当化イデオロギーがナチ・イデオロギーを支えたことに気づくよう支援	生徒による iPad を活用した発表 ＜生徒の発表内容＞ 影響を及ぼすための伝説の活用とそれを信じたい国民→国民がそれを信じたことがポイント 陸軍最高司令部とヒンデンブルクが責任転嫁し、それを国民が信じたという政治的宣伝とイデオロギーの形成→イデオロギーの正当化（正当化イデオロギー）がポイント、敗北から逃避するための正当化 このイデオロギーで陸軍最高司令部とヒンデンブルクは権力の維持を図り、社会民主主義者が罪を着せられたという右派と保守派の責任転嫁、社会民主主義者や民主主義者に対する非難 戦時国債の購入などの戦争協力での戦争勝利への期待と戦況悪化による屈辱的な衝撃→1917 年の水兵反乱といった祖国に対する裏切り行為 社会民主主義政党による平和決議と陸軍最高司令部と保守派と右派による拒否→「背後からの一突き伝説」の道具化と右翼によるユダヤ人への敗北の責任転嫁がナチ党を飛躍させたという影響	生徒による学習成果の発表 グループの学習成果（事実判断）の深化
終結	教師による総括 ＜教師の発言内容と問いかけ＞ 「背後からの一突き伝説」を今日の見方から今日の価値に基づいて評価する 「背後からの一突き伝説」は嘘であることが明らかになった後も何度も道具化された 敗戦の戦犯、身代わりを見つけることで陸軍最高司令部を免責する ワイマール共和国は伝説を通して過激化していくがこの問題の責任を負うのか、この伝説が機能することで分断が促進されるのか 伝説には、保守的なエリート層と国家社会主義をイデオロギー的に結びつける機能的な意義がある 「背後からの一突き伝説」は「我々は団結する」という政治的意図を強めるために機能化する→なぜ私たちがこの伝説にいまだに取り組むのか（価値判断） 陰謀論がなぜそれほど強い影響を及ぼすのか	文献史料に基づいた「背後からの一突き伝説」が持つ今日的な意義に関する全体での議論 ＜議論における生徒の発言内容＞ 伝説は、保守派と国家社会主義者がともに社会民主主義者が権力の座にあるべきではないと考えるのを後押しした ナチスの時代に、伝説がプロパガンダのためにしばしば活用されたことが重要なポイント 今日では伝説の機能化を陰謀論と呼ぶ	価値判断に向けた考察 今日の見方に結びつけた現在関連への転移

（授業記録より筆者作成）

本授業では、複数の歴史教科書[12]、歴史雑誌の記事[13]、歴史書[14]が史資料とされる。本授業において特に活用された資料が以下である。

（Weber, Jan Robert：Hindenburgs Dolchstoßlegende, in. Praxie Geschichte 5 (2022), S. 20-21.）

1924 年 12 月 7 日の帝国議会選挙に向けたドイツ国家人民党の選挙ポスターに描かれた「背後からの一突き」の描写

(https://www.schule-bw.de/faecher-und-schularten/gesellschaftswissenschaftliche-und-philosophische-faecher/landeskunde-landesgeschichte/module/bp_2016/imperialismus_und_erster_weltkrieg/kriegsende-1918-und-die-dolchstosslegende より引用)

週刊誌“Die Zeit”のオンライン記事（2017 年 11 月 18 日）[15]

ケムニッツ工科大学のアレクサンダー・ガルス教授による『不敗軍の物語』

パウル・フォン・ヒンデンブルクは、1919 年 11 月 18 日に初めて帝国議会に登場した。皇帝の代理というカリスマ性をまとった元帥は、「大戦の責任問題に関する調査委員会」の証人として、第一次世界大戦の結果についての見解を述べた。これは、「背後からの一突き伝説」として、いわばブロンズに鋳造された瞬間であった。それは、ドイツ軍は不敗であり、1918 年の敗北は、誇り高い陸軍とその指揮官が背後から一突きされた祖国のせいであるという主張にあった。

解任された将軍と陸軍最高司令部（OHP）の構成員であるエーリッヒ・ルーデンドルフとドイツ民族主義の政治家カール・ヘルフリッヒとの談合において演出された登場において、ヒンデンブルクは「責任がどこにあるのかは明らかである」と言った。彼は補足した。「イギリスの将軍も公然と言った。「ドイツ軍は背後から刺殺された」・・・さらに証拠が必要なら、それはイギリスの将軍の発言、私たちの敵のその勝利に対する過度の驚きにある」。ヒンデンブルクは、「タンネンベルクの英雄」としての全ての威光と堂々たる姿での発言を通して、故郷で最後まで戦う意志を見せる軍に対する計画的で目標に即し

た妨害工作に関する嘘を強化した。
　その際に、ヴォルフラム・ピタがヒンデンブルクの伝記で書いたように、ヒンデンブルクはその責任を国民ではなく、彼にとり重要な「民族共同体の均質性」を崩すことを試みた政党や労働組合の組織的な構成員に押しつけた。「1914 年の精神」が共同体へと作り上げられた国民というまとまりと意志を示すようであるので、このような「全体論的な政治理解」は戦争が始まった当初に世紀の瞬間を迎えたと推測された。
　それから 4 年後には、その名残りはほとんど見られなくなった。ヒンデンブルクに言わせれば、戦争が犠牲を必要としたのは、少なくとも 1917 年にアメリカが参戦して以降、ドイツ軍がもはや連合国に太刀打ちできなくなったからではなく、別の理由によるものだった。祖国で新たに強化された政治勢力が、ハーゲンの狡猾な槍突きのように（ワーグナーの歌劇「ニーベルンゲンの指環」においてハーゲンがジークフリートの背中を槍で突いて殺害したことを意味する：訳者注)、ジークフリートとともに、「疲弊した前線」を背後から突いたのである。ヒンデンブルクは 1920 年に、その回顧録『わが生涯』の中で、ニーベルンゲンの物語に関連づけてこう述べている。
　戦争直後、背後からの一突きに関する印象深い絵が最初に現れた。調査委員会でのヒンデンブルクの重要な登場のほぼ 1 年前の 1918 年 12 月 17 日に、権威ある“Neue Zürcher Zeitung”が、ヒンデンブルクによって重要な証人として引き合いに出された、背後からの一突きを表現したイギリス将軍のフレドリック・モーリスを引用した。モーリスがいくら自分が利用されていると弁明し、そのように論じてはいないと否定しても、それにより根強い噂が生まれた。いわば、スイスやイギリスのフィルターを通して、信憑性が引き出され、高められた。
　さらに、同じ日に国家主義的、保守的、反共和政の立場を取る“Deutsch Tageszeitung”が記事を取り上げ、背後からの一突きの話はすぐに日常に周知となった。1919 年 6 月のパリ和平交渉を前に、この話題が最高潮に達したので、左翼知識人向け週刊誌“Die Weltbühne”は、不敗の軍が背後から刺されるという、耐えがたく、至るところに広まった話に不満を訴えた。
　背後からの一突きのイメージが厚かましい嘘としてすぐに暴露されなかった原因を説明する一連の理由がある。第 1 として、1918 年初秋における敗北の知らせが大抵のドイツ人に引き起こした驚きや衝撃の効果が挙げられる。ブレスト＝リトフスク条約の厳しい講和条約をもたらした東部でのソビエト連邦に対する勝利、西部での春の攻勢、誇張された勝利のプロパガンダ、ドイツには外国の軍隊はほぼないという事実は、祖国への期待を再び高め、そして、ますます情け容赦なくその期待が裏切られることになった。軍の崩壊後、誇張された期待に代わって、屈辱と不安の感情が現れた。
　さらに、1917 年春以降のますます厳しくなる供給状況に直面して、1918 年 1 月に最高潮に達した祖国における絶え間ないストライキや、ドイツ社会民主党やドイツ進歩党に支持された合意による平和をめざす 1917 年 7 月のドイツ帝国会議での決議が、陰謀論にぴったりとはまった。
　これは祖国からの妨害工作の証拠ではないのか？まもなく、軍が主導的にこれを問い、自ら応えた。1918 年 10 月初めの休戦の日、軍は皇帝に、エーリッヒ・ルーデンドルフが陸軍最高司令部の参謀将校たちに知らせたように、「私たちがここに至った主な原因であると考える集団を政府に連れてくる」よう頼んだ・・・今や集団を砕いて入れたスープを食べるべきなのである。陸軍最高司令部は自己暗示と不誠実を織り交ぜながら責任から逃れる道を探していた。責任は、社会民主主義的で自由主義的なブルジョア陣営の指導者に押しつけるべきであった。

懸念はまったく正当なものではない
　ワイマール共和国の最初の政権を形成した勢力は、敗北の犯罪者として尻ぬぐいをせねばならず、その後は新しく誕生した民主主義と同列に語られるようになった。背後からの一突きの嘘において、共和国と民主主義に対する基本的な攻撃は常に揺れ動いた。フリードリヒ・エーベルトが、1918 年 12 月 10 日に祖国へ帰還した兵士にブランデンブルク門の前で挨拶した言葉「あなた方を越える敵はいない」はほとんど役に立たなかった。歴史家のマーク・ジョーンズからみれば、こうすることで、彼は革命がドイツ軍を背後から刺したという考えを人々の頭に定着させるのを手助けしたのである。これには正当な理由で異議を申し立てることができ、エーベルトはその挨拶で、新しく政治的に変貌したドイツに疲弊しきった前線兵士たちを迎え入れるために、節度、バランス、統合への提起をしたかったのであり、彼らを一突きにするものでは決してなかった。
　どのような解釈であっても、エーベルトは極右の敵を満足させることはできなかった。左派の批判家たちも、彼を裏切り者とみなした。数年後に社会民主主義の立場での世論は、「背後からの一突き伝説の２つの圧力」について語った。左派の側からは、1925 年 11 月 9 日の共産主義的な“Rotenbühne”の風刺画で具象的に表現された。そこには、ブルジョア的なスーツ姿のエーベルトが、ドイツ義勇軍の兵士に脇を固められ、赤旗を掲げる革命労働者の背中に短剣を突き刺す姿が描かれている。これは全ての形態で、今日まで周知の右派の一突き伝説に関するイメージを思い起こさせる。即ち、1924 年 12 月の帝国議会選挙でのドイツ国家人民党の選挙ポスターである。そこでは、赤い衣をまとった覆面のプロレタリ

アが、倒れてもなお黒、白、赤の旗を掲げる前線の兵士を背後から刺している。

２枚の具象的な描写は、ミュンヘンでの「背後からの一突き伝説裁判」における公的議論が最高潮に達していた時期のものである。“Süddeutschen Monathefte”の編集者であるパウル・ニコラス・コスマンが、1925 年秋に社会民主主義の立場を取る“Münchener Post”の編集長であるマルティン・グルーバーを名誉棄損で訴えた。グルーバーは、自身の月刊誌を「背後からの一突き伝説」の主張を広めるための主要機関誌のようなものにしていたコスマンを、歴史を改ざんしていると非難した。裁判ではかつての参謀次長であるヴィルヘルム・グレーナーのような著名の人物が証人として証言したので、この裁判はとりわけ注目を集めた。グレーナーは、総じてエーベルトと社会民主主義の多数派を、陸軍最高司令部に協力し、国家の維持をめざした政治を追求したと証言した（これは、労働者に対する裏切りという左派の背後からの一突きの主張を再びかき立てた)。結局、裁判所は誤りであると裁定し、嘘と扇動というグルーバーの非難を認めなかった。

それにより、背後からの一突きに関する主張は実質的に反駁された。さらに、社会民主党が任命した専門家、政党から独立した歴史家のハンス・デルブリュックなどが、裁判や、帝国議会によって招集された「大戦の責任問題に関する調査委員会」において声明を発表した。確かに、委員会の活動を通して、ワイマール共和国期には議論は客観的になされたが、その影響は限定的なものにとどまった。この問題に関する社会の溝を埋めたり、あるいは少なくとも橋渡しをしたりすることは決してうまくいかなかった。

1920 年代の半ば以降、コンセンサスが得られることはなく、公的議論はますます少なくなった。中道左派とリベラル集団では、1919 年 1 月に既に“Die Weltbühne”が論じていた「不埒な嘘」は毎回反駁されるでたらめであるとされた。しかし、SPD の大臣であるアドルフ・ケスターの手による小冊子のタイトルのように、「背後からの一突き伝説に終止符を打とう！」といった呼び声は、全ての政治世界の構成員には遠く届かなかった。さらに、右派の間では、背後からの一突きは議論の余地のない事実とみなされた。急進的で国家主義的な「全てのドイツ的」、「民族的」に新しく編成された集団では、この主張はさらに先鋭化していった。今や、さらし者になっているのは、もはや中道左派やリベラル・ブルジョア陣営の個々の政治家や論争的な国会議員（「祖国を失った」「条約履行の政治家」）ではなく、欺瞞に満ちて嫌悪すべき集団とみなされる十把一からげの集団である（マルクス主義者、ユダヤ人)。背後からの一突き伝説はこの先鋭化した変種において、執拗に反社会的・反ユダヤ主義的なステレオタイプに有効であった。エルンスト・トレルチのような時代の変化の注意深い観察者は、既に 1919 年 3 月には、極右の立場での「性格の悪いユダヤ的な民主主義」という発言をある程度不安を持って確認していた。しかし、それ以上に彼が驚いたのは、善意であれ悪意であれ、それを信じようとする姿勢が右派集団をはるかに超えて広がっていることであった。これがすべて不合理、出まかせ、あるいはあからさまな嘘であることは、人々にとってはどうでもいいことなのである。

背後からの一突き伝説の嘘は幅広い多様な右派にとり、合意と自己確認に有益であった。歴史家のボリス・バースがその模範的な作品である『背後からの一突き伝説と政治的崩壊』において記載したように、背後からの一突き伝説には、「保守的なエリート層とナチズム間のイデオロギー的な結びつきという機能的な意義」が与えられた。「第三帝国」においては、「11 月の犯罪者」（第一次世界大戦を終結させた停戦協定を交渉し署名したドイツの政治家に対する呼称：訳者注）の忌まわしい影響のように、より徹底して背後からの一突きの主張が持続した。最終的に、実際には軍事的な崩壊が原因であった革命が、ナチストによって敗北の原因とみなされた。背後からの一突き伝説に関する記載は、本、百科事典、辞典から削除された。この歴史物語への信仰がいかに大きかったかは、第二次世界大戦の最後で示されることになった。戦争末期まで、SS の子分たちは、想定された背後からの一突きの再発を防ぐために、脱走兵に対して冷酷なまでに厳しい措置を取った。この伝説が長く継続することを鑑みると、1945 年以後も新しい背後からの一突きの論議に対する不安を耳にしなくてはならないことは不思議ではない。論説委員であるエルンスト・フリードレンダーが 1947 年にこれに関して“Die Zeit”で精力的に警告し、同年に歴史教育学者のハインツ・シュレーダーが新しい伝説の形成に対するパンフレットを出版した。両者とも、1944 年 7 月 20 日のレジスタンスの闘士たちが英雄として尊敬されるのではなく、裏切り者の烙印を押されることを懸念した。

戦後最初の 10 年に、ヒトラーに対する抵抗の明らかな功績をはっきりと認識した者は、この懸念が全く不当なものではないと分かった。しかし最終的には、シュレーダーがあれほど早く、鋭く呼びかけていた「極めて残酷な真実」が貫徹された。ジークフリートとハーゲンはニーベルンゲン伝説での役柄はそのままであったが、ドイツの背後からの一突きの演劇への再登場は許されなかった。

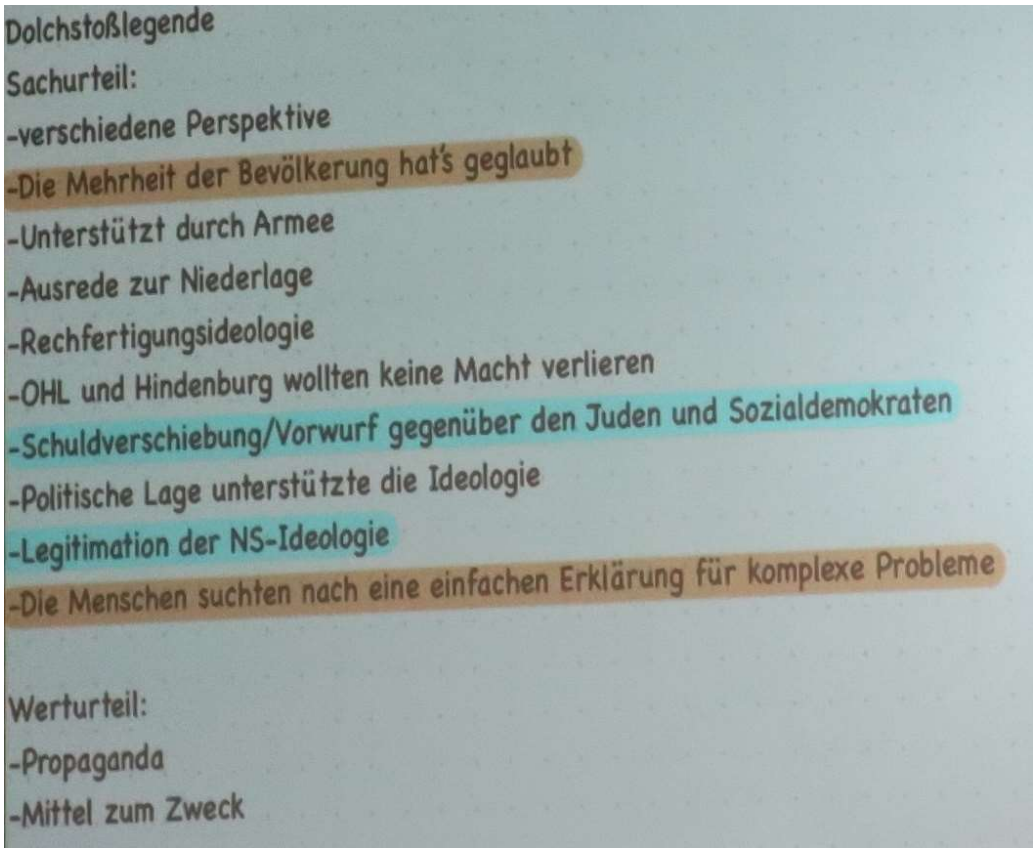
（“Die Zeit”のオンライン記事を筆者訳出）

本授業は、導入、展開Ⅰ、展開Ⅱ、終結からなる。導入では、まず、「背後からの一突き伝説」に関するビデオを視聴する。このビデオのテーマは、「背後からの一突き伝説は、選挙闘争のテーマになる」である。ここでは、敗戦が国内の崩壊と戦勝国からの圧力をもたらし、共和国を分裂させ、伝説が左派に対する効果的なプロパガンダ戦略となったこと、共産主義者はその革命的な目標を社会民主主義者の政策で実現できなかったこと、ユダヤ資本が 11 月の犯罪者をそそのかしたこと、鉄兜団（ヴァイマル共和政時代のドイツの在郷軍人組織）が多くの元前線兵士の情緒的な故郷となり、旧軍の精神が呼び起こされたことが解説される。次に、ビデオ視聴後、ハイター氏は、「背後からの一突き伝説」というプロパガンダの事実分析と事実判断をするという授業目標を提示し、背後からの一突き伝説の成立と強い影響はどのように判断できるのかと問いかける。導入では、授業を貫く問いを設定し、「背後からの一突き伝説」をどのように捉えてどのような態度決定をするのかという問題の提示と問題意識の形成が図られる。

展開Ⅰは、導入で設定された問いに基づいて、「背後からの一突き伝説」というプロパガンダを成立と影響の両面から検討するグループ活動である。生徒が 9 名であり、3 名ずつの 3 グループが形成された。ここでは、1 グループのみの活動を検討する。そのグループでは、まず、「背後からの一突き伝説」が成立した経緯を概略する事実確認がなされた。彼らは、大戦の敗北後のフランスとの和平交渉において、ヒンデンブルクが陸軍最高司令部は最善を尽くしたが、政治が軍隊を背後から刺したとして軍の責任を回避しようとしたことで、伝説が成立したと整理した。次に、「背後からの一突き伝説」がどのように利用されたかを考察する事実判断がなされた。彼らは史資料、特に、ガルス教授の論の 5～6 段落目に基づいて、極右が新聞を通して、反ユダヤ主義的立場から左翼、ドイツ社会民主党を攻撃するプロパガンダを展開

し、（ガルス教授の論の 7 段落目に着目して）戦争の敗北で衝撃を受けた国民が信じるよう伝説を利用したことを話し合った。そして、プロパガンダには嘘を定着させる宣伝効果があり、「戦争に負けたのではなく、背後から鋭い刃物で一突きされた」という表現は、敗北を認めたくない国民にとっても耳障りがよく、信じやすいことを検討し、「背後からの一突き伝説」が軍の責任回避や極右による左翼やドイツ社会民主党を攻撃する宣伝に利用され、それを国民が信じたという事実判断がなされた。そして、伝説が右翼をますます過激化させ、嘘が定着したこと、ミュンヘン一揆では極右が関わったこと、ヒトラーが伝説を宣伝方略としたことといった「背後からの一突き伝説」の影響を考察することで事実判断の深化が図られた。これらの考察結果から、このグループはハイター氏が本展開でめざした事実確認と事実判断を適切に行っていると判断することができる。

展開Ⅱは、グループ活動の成果を発表する活動である。１つのグループが iPad で作成した発表資料が以下である。


Dolchstoßlegende
Sachurteil:
-verschiedene Perspektive
-Die Mehrheit der Bevölkerung hat's geglaubt
-Unterstützt durch Armee
-Ausrede zur Niederlage
-Rechfertigungsideologie
-OHL und Hindenburg wollten keine Macht verlieren
-Schuldverschiebung/Vorwurf gegenüber den Juden und Sozialdemokraten
-Politische Lage unterstützte die Ideologie
-Legitimation der NS-Ideologie
-Die Menschen suchten nach eine einfachen Erklärung für komplexe Probleme

Werturteil:
-Propaganda
-Mittel zum Zweck

（日本語訳）

背後からの一突き伝説
事実判断：
－多様な見方
－大多数の国民がそれを信じた
－軍によって支持された
－敗北に対する言い逃れ
－正当化イデオロギー
－陸軍最高司令部とヒンデンブルクは権力を失いたくなかった
－ユダヤ人と社会民主主義者への責任転嫁／非難
－政治的伝説がイデオロギーを支える
－ナチ・イデオロギーの正当化
－複雑な問題に対する単純な説明を求めるのが人間である

価値判断：
－プロパガンダ
－目的のための手段

発表資料に基づいて、生徒が成果を発表した。この資料を作成したグループは、陸軍最高司令部とヒンデンブルクが大戦の敗北の責任を回避するために伝説を作り出し、ユダヤ人と社会民主主義者に責任転嫁したこと、大多数の国民が信じたことで伝説が正当化イデオロギーとなり、ナチ・イデオロギーへとつながったといった「背後からの一突き伝説」に関する事実判断をしていることが窺える。ハイター氏は史資料に基づいて根拠づけながら、伝説が陸軍最高司令部とヒンデンブルクを支え、ナチズムという新しい支配を根拠づけるイデオロギーをもたらしたこと、正当化イデオロギーをナチ・イデオロギーと結びつけることで、グループの事実判断の深化を図っている。展開Ⅱでは、グループでの学習成果の発表とハイター氏の働きかけにより、グループ活動の成果をさらに深化させた事実判断の形成がなされている。

終結では、「背後からの一突き伝説」が持つ今日的な意義を全体で議論する。ハイター氏はここで、前述の生徒の発表資料の２行目にある多様な見方は、事実判断ではなく、判断の観点であることを指摘する。当時の保守派、国家社会主義者の見方だけではなく、今日の見方も考慮しながら、保守派と国家社会主義者がともに社会民主主義者を権力の座から降ろすという共通認識に至るために伝説が機能的・道具的な役割を果たしたことを説明する。そして、「この伝説の機能化を今日では何と呼ぶでしょうか」という問いを投げかけ、生徒から陰謀論という概念を引き出すことで、伝説の機能化が現在の陰謀論へとつながるという伝説を意味づける価値判断へと導いている。終結は、展開Ⅱで深められた事実判断を、今日と意義深く結びつける現在関連を通して、価値判断へと進展させるものである。

以上の展開から、事実分析から事実判断を経て、「背後からの一突き伝説」がいかにして

今日の陰謀論に至るまで機能化するのかを考察することで伝説を評価する価値判断にまで到達する授業になっていると結論づけることができる。

以上のハイター氏の授業の検討から、本授業の特徴が３点挙げられる。第１が、目標から授業展開、授業の総括に至るまで、一貫して判断コンピテンシーの育成を図っていることである。伝説に関わる事実判断から、陰謀論をもたらしたという伝説の意義に基づいた価値判断へとつながる目標に即して、授業展開ではグループでの事実判断、全体での事実判断の深化と、現在関連による価値判断へと移行することで、段階的かつ計画的に判断コンピテンシーの定着と深化がなされている。

第２が、多様な見方を組み入れることで、判断コンピテンシーの育成を図っていることである。ヒンデンブルクや陸軍最高司令部、反ユダヤ主義者、社会民主主義者、共産主義者、国民などの多様な視点から伝説を捉えることで根拠に基づいた事実判断、さらには今日の見方から伝説を機能化させることでの価値判断が図られており、見方を基に判断コンピテンシーの育成を図っているといえる。コア・レアプランにおいても、「多様な見方を確認し、取り入れることが判断コンピテンシーの構成要素とされる」とあり、コア・レアプランに即していると考えられる。

第３が、判断コンピテンシーの育成を中心としたコンピテンシー志向の歴史授業であることである。前述の通り、コア・レアプランの内容領域⑤では、事象コンピテンシーと判断コンピテンシーの育成がめざされており、本授業はコア・レアプランに即して伝説がもたらしたイデオロギーを核として過去と現在を結びつけて価値判断まで視野に入れた判断コンピテンシーがコンピテンシーの主軸となっている。さらに、事実判断においては、3 冊の教科書、ビデオ、風刺画、学術的な文献史料といった多様な史資料を活用して獲得した知識を根拠とすることを求めており、事実判断の形成には事象コンピテンシーや方法コンピテンシーが重要な役割を果たしており、事象コンピテンシーや方法コンピテンシーが関連づきながら判断コンピテンシーを育成するというコンピテンシー志向の授業といえる。

これら 3 点の特徴を有するハイター氏の歴史授業は、多展望性や他者理解、現在関連といった歴史学習の原理に基づき 、史資料の脱構築的な分析や検討から歴史を解釈し再構築するという歴史学の方法論に基づく高度な歴史的思考を通して歴史意識を育成するという NRW 州の歴史科がめざす歴史学習を具現化した優れた歴史授業であると評価することができよう。そして、この歴史授業は、歴史を探究する歴史的思考を図る「日本史探究」や「世界史探究」といった新しい科目を設定した日本の高等学校における歴史学習に対して有益な示唆を与えてくれるものである。

（https://www.ge-duisburg-sued.de/）

【註】

[1] Ministerium für Schule und Weiterbildung des Landes Nordrhein-Westfalen(Hrsg.): Kernlehrplan für die Sekundarstufe II Gymnasium/Gesamtschule in Nordrhein-Westfalen Geschichte, 2014.
[2] Ebenda. S.12.
[3] Ebenda. S.11
[4] Ebenda. S.12
[5] Ebenda. S.15-16.
[6] Ebenda. S.16.
[7] Ebenda.
[8] Ebenda. S.16-17.
[9] Ebenda. S.17.
[10] Ebenda. S.17-19.
[11] ドイツにおける歴史学習の原理に関しては，Sauer, Michael (2007) Geschichte unterrichten. Eine Einführung in die Didaktik und Methodik, 6.. aktualisierte und erweiterte Auflage. Kallmeyer Verlag, S. 76-93 を参照。
[12] Geschichte und Geschehen. Qualifikationsphase Oberstufe Nordrhein-Westfalen,Klett 2011,Horizonte. Qualifikationsphase Oberstufe Nordrhein-Westfalen, Westermann 2015, Zeitreise 3. Differenzierende Ausgabe Nordrhein-Westfalen,Klett 2019 という 3 冊の教科書を生徒は活用している。
[13] Legenden, Mythen, Lügen. Kontinuität und Wandel, Praxie Geschichte 5 (2022).
[14] Volker Ullrich: Die nervöse Großmacht 1871 – 1918. Aufstieg und Untergang des deutschen Kaiserreichs. Erweiterte Neuausgabe. Fischer Taschenbuch 2013.
[15] Gallus, Alexander: Dolchstoßlegend. Die Mär vom unbesiegten Heer, ZEIT ONLINE. https://www.zeit.de/zeit-geschichte/2017/03/dolchstosslegende-erster-weltkrieg-nationalsozialismus（2024 年 3 月 12 日確認）

【謝辞】本資料で紹介した Gasamtschule Süd での授業の収集については，学校ならびに Maria Heiter 教諭のご厚意に心から感謝するものである。